

図書寮蔵紅葉山御文庫本目録（一）——経部——

白井和樹

一、序

1. 小序

平成二十六年四月に、漢籍を専門に扱う第三図書調査室が新設され、書陵部（図書寮文庫）所蔵の漢籍につき調査・研究の体制ができた。その成果の公表が望まれるが、その第一弾として、図書寮漢籍の核たる紅葉山御文庫旧蔵図書を目録を作ることとした（但、一部国書を含む）。

加えて、いくつか注意すべき点を陳べ、今なお不明点の多い紅葉山御文庫本につき読者の便を図るものである。

2. 紅葉山御文庫本の現況

現在、旧紅葉山御文庫本（以下「御文庫本」と称呼）の大部分は国立公文書館（内閣文庫）に、残りの多くが宮内庁書陵部（図書寮文庫）に、僅かなものがその他の機関に蔵せられている。さらに明治初期に焼失・散佚、あるいは処分されたものなども幾許か存する。このような状況ゆえ、全貌を把握

している者など誰もいないのが現状であり、本稿で扱うのも御文庫本の一部に過ぎないという点をまず御諒解いただきたい。

3. 本稿における御文庫本判定基準

紅葉山御文庫は二百年以上の歴史があるので、何らかの基準なくして図書寮蔵御文庫本なるものの全貌は明らかにしえぬ。

そこで本稿では、以下の基準を以て図書寮蔵の御文庫本と称呼する。

☆ 『楓山文庫御書籍目録』^①所載のもの——すなわち元治元々慶応二

年（一八六四～六六）の時点で紅葉山御文庫にあったもの——で、

現在宮内庁書陵部図書寮文庫に蔵せられるもの（但、便宜一度は紅葉山御文庫および図書寮にあったと確定しうるものも併せ著録する）。

『楓山文庫御書籍目録』（函架番号451-51。外題「元治増補」御書籍目録^②）。以下『元治目録』と呼称）は、江戸期最後の紅葉山御文庫の蔵書目録で、浄書本と考えられている。

なお、内閣記録局よりの移管本を主とする関係上、移管時の分類を土台と

して、内閣移管本のうち紅葉山御文庫旧蔵でないものと明らかになるものを削除し、代りにそれ以外の時期に移管され御文庫本と認定しうるもの等を増補した。移管時の分類を土台としたのは、明治以来、現在の管理状況に至るまでの連続性が認められるためである。

図書寮蔵本は御文庫本のほんの一部に過ぎないとはいえ、数が膨大なので、さしあたり漢籍の四部分類に従って作成した。これは、移管時の分類に基き、所謂準漢籍の、邦人の著作（『元治目録』では国書部）や朝鮮人の著作（同じく附存部）等でも、四部分類で表し得れば、すべて経・史・子・集それぞれで分類するものである。本稿ではまず経部を扱う。その一覧は、本稿末尾（四〇～四三ページ）に掲げた。

二、経部図書

1. 概要

今回経部図書として認定・著録したのは凡て七五部七八点⁽⁴⁾。宋元版など⁽⁵⁾『御書籍来歴志』（以下『来歴志』。本稿では『元治目録』附録の本を使用）所載本を中核として、明清の版本・日本の古版本・邦人著作の浄書本などを含む。

明治二十四年（一八九一）、経部図書は七五部宮内省に移管されたが、うち『来歴志』所載本は二六部である。⁽⁶⁾『来歴志』所載で落ちているのは『別本礼記正義』⁽⁷⁾『十三経註疏』の二部。前者は国立公文書館（内閣文庫）蔵『附釈音礼記註疏』（請求番号 経75-1-1）、⁽⁷⁾後者は国立公文書館（内閣文庫）蔵の同名書（請求番号 経60-1-1）。

経部図書のひとつの特徴は、「貴重図書」に分類されているものの割合が比較的高いことである。これは、他部に比して、経部図書の総数が少ない上に、宋版・金沢文庫本が多いためだろう。

2. 図書点描

さて、概要だけではよく分からぬ。一覧だけでは無味乾燥である。そこで以下にいくつか特徴的な図書を挙げて、その解題を誌してみたい。

① 『周易伝義大全』

函架番号401-13

明・胡広等奉勅撰、朝鮮刊。線装・縦長本・一三冊⁽⁸⁾。程頤の『易伝』・朱熹の『周易本義』を併せた董楷の『周易伝義』を承けて明の永楽年間に編まれた易経の注釈書。

文禄二年（一五九三）、薩南学派の儒僧・文之玄昌が帰化人から譲られた

三冊を核に、さらに求めて補ったものだという（慶長四年（一五九九）玄昌識語）。玄昌は補写も幾冊かあると記すが、現存一三冊いずれも刊本ゆえ、

その後揃ったものと推する。その後寛永四年（一六二七）頃本書は惟方正円の手に渡り、彼が玄昌の未加點のところに加點した（正円諸識語）。正

円は「武之江城」で識語を書くから、この頃本書は江戸に移ったか。その後、

六代将軍徳川家宣の蔵書となる（桜田御文庫本）。他の桜田御文庫本と同じく正徳三年（一七一三）紅葉山御文庫に収まった。『官庫書籍目録』「桜

田御文庫御書物」部に著録。

② 『御覧』易経揆一』

函架番号401-52

清・梁錫璵撰、乾隆十六年（一七五二）刊。線装・縦長本・一〇冊⁽⁹⁾。『易

経揆一』一四巻・『易経啓蒙補』二巻。清代中期の易経の注釈書。豊後佐伯藩主毛利高標旧蔵。

「御覧」を冠するのは、清の高宗（乾隆帝）の求めに応じて奉呈されたからだ。本書にはいくつか見るべき特徴があるが、まずは封面および高宗の二度の上諭で、皇帝に関わるため朱刷である。最終冊——『易経啓蒙補』——の一部の図が、墨による単色刷ではないことも押えておきたい。それというのも、茶色の部分があり、しかもそれが酸化による変色らしい——銀か何かだろうし、先の首冊朱刷の丁等と併せ考えても、仲々手が込んでいる。また、下綴の紙縫が長年の加重で裏表紙に形を浮び上がらせているのが看取でき、唐本の装訂の有様を窺い知るのに恰好の書だ。毛利高標購得以前の蔵書印「第津高氏監蔵」が捺される。⁽¹⁰⁾ 高標の孫・高翰の献納により、文政十一年

（一八二八）収書。

③ 『禪菴礼経蔵本』

函架番号401-60

清・康熙十五年（一六七六）韓千秋撰、詩政堂刊。線装・半紙本大・四冊。⁽¹¹⁾ 清代前期の礼記の注釈書。

帙と図書本体とが同じ灰茶色でかつ同じ黄色の絹題簽を用いる。しかも図書本体の装訂は唐本のそれで、本邦での改装とは考え難い（原装と認めてよい）。以上から帙自体も元のものと思定できる。すなわち、貞享三年（一六八六）に収蔵された（『御文庫目録』）当時のままの姿を伝えると思しい。これが本書最大の特徴である。絹題簽・絹張の帙、そして白く綺麗な料紙——これは単に美本というだけでなく、それなり的高级品だったと言って良さそうだ。

④ 『七経孟子考文』

函架番号401-81

『七経孟子考文』は、享保十一年（一七二六）山井鼎撰、浄書副本。線装・大本・三三冊。⁽¹²⁾ 山井鼎（崑崙）は、紀伊の人で、伊予西条藩儒。荻生徂徠に学び、同門の根本遜志（武夷）とともに、易・書・詩・礼記・春秋・論語・孝経および孟子につき、足利学校の旧鈔本と宋刊本を用い校勘したもの。浄書本は享保十一年藩主松平頼渡に献ぜられ、次で同十三年頼渡はこれを幕府に進めたのである（『徳川実紀』同年六月十一日条）。浄書本そのものは現在京都大学附属図書館に蔵せられ、図書寮本は幕府に進められた副本とされる。⁽¹³⁾ 同十六年九月七日の収書（『御書物方日記』（以下『日記』）同日条・『右文故事』卷二三）。『日記』同日条に形態的特徴が記される。曰く、

新規御預ケ
七経孟子考文書本 三十二冊一箇但、二重宮、

花色紋形表紙、糸紫、外題萌黄、

右、浅黄羽二重袷服紗包、内箱桐白木、萌黄糸さなな紐付、

摺板一枚アリ、上箱桐白木、木綿さなな紐付、

但、献上之年月御書付添候共一通受取之、^{○大日本近世史料}

と。何となく現在の姿と変らぬようだが、題簽の焼け痕らしきものや、表紙の改装せられたような様子から推すれば、あるいは火でも蒙ったかもしれない。なお献上の後、十三年七月に荻生北溪（観）と室鳩巢に校合が命ぜられ（『日記』享保十六年九月七日条・『右文故事』卷二三）、成った本が、『七経孟子考文補遺』である。⁽¹⁴⁾

⑤ 『満文輯韻』（附・満文散語解）

函架番号401-82

『増訂』満文輯韻

函架番号401-75

『満文輯韻』は、文化十三年（一八一六）高橋景保撰、浄書本。線装・

大本・二一冊⁽¹⁵⁾。満洲語辞書。『満文輯韻』一九冊、『満文散語解』二冊から成る⁽¹⁶⁾。和装本ながら左綴という一風変った書物。

高橋景保は、文化元年父・至時を襲^{よしとき}つて天文方となり、暦・測地・洋書翻訳等に努め、のち御書物奉行を兼ねた。文化五年レザノフの将来した満文外交文書の翻訳を命ぜられ(同七年『満文強解』上呈)、この仕事を通じ満洲語の第一人者となり、成果をまとめたのが本書である。『化政新収書目』に「満文輯韻 十九冊／満文散語解 二冊」が「文政四年辛巳二月新収」と見えるのがそれだろう。

さて景保は、かのシーボルト事件に関与して、文政十一年十月十日禁獄せられ、翌年二月に獄中死した。このとき彼の蔵書は没収されたが、『増訂満文輯韻』(以下「増訂本」)もその内に含まれたらしい⁽¹⁸⁾。増訂本尾冊最終丁に「戊子十月初八日浄書畢、」とあるが、これは(全二六卷中)卷一、三の末で、かつ「戊子」は文政十一年である。すなわち未完成にして投獄の直前である。森潤三郎氏は「文化十三年満文集韻、満文散語解成り、尋て増訂満文輯韻成り、文政三年に至り満洲文字に關する著作完備してこれを上り、」と陳べるが、増訂本未だ成らず、前二作のみ文政三年に上呈、翌四年収書と見るのが至当だろう。

⑥ 『礼記正義』

函架番号401-84

寛政六(一七九四)八(一七九六) 吉田直躬・杉浦吉統・竹内道生足利学校宋紹熙刊本影写。線装・大本・三五冊⁽²⁰⁾。宋刊本の影写だが、写しているのは本文のみで、匡郭・界線・書入等は省く。原本は足利学校に今なお存す。尾冊末の林衡(述斎)識語に拠れば、足利学校本の善本たるにより、幕命を以て書写者を選び影写させたことなどが記される。次で天保十二年(一八

四一) 杉山精一の識語は、影写者三人の名(これはまた各冊尾に「某臆」の形で示される)や、享和二年(一八〇二)十二月収儲なることなどを記す。『来歴志』の記述もこれに拠ったか。

⑦ 『四書白文』

函架番号506-32

明・(姜)立綱⁽²¹⁾写、線装・特大本・八冊。四書の本文を、真つ白な美しい紙に謹書したもの。第八冊尾に明の政治家・書家の王世貞(一五二六-九〇)と明の政治家・蔵書家の趙用賢の識語がある。王識語に「当是先朝春宮進読本也、」とあり、皇太子の教科書だったという。確かに、大きさはもとより、字様・料紙や浅葱色絹題簽、そして何より匡郭も含めすべて手書きであることから、並々ならぬ本たること疑いないが、果して姜立綱の書たるか、(そう鑑定する)両識語そのものも信じうるか、問題は残る。人見竹洞「紅葉山文庫日録」(註(30)参照)にすでに見えるので、延宝八年(一六八〇)以前の収書だが、それ以前の来歴については、趙識語の「張幼于所蔵」、「王泰吉印」蔵書印のほか手掛りがない。すでに福井保氏が指摘されているが、本書は貴重書として禁帯出であった(『日記』文政二年七月五日条)。

* * *

この他陳べるべき書物が多いが、紙幅の都合上ここで止めるので、その他の図書については『来歴志』『経籍訪古志』『古芸余香』『図書寮漢籍善本書目』『図書寮典籍解題・漢籍篇』および福井『紅葉山文庫』等を参照せられよ。

三、紅葉山御文庫の目録六種——各論（1）

現在筆者の確認した限りでは、紅葉山御文庫の総目録に次の六種がある。

- 1) 『御文庫目録』
ごぶんこもくろく
- 2) 『官庫書籍目録』
かんこしょじやくもくろく
- 3) 『重訂御書籍目録』
じゅうていごしょじやくもくろく
- 4) 『重訂楓山書籍目録』
じゅうていもみじやましょじやくもくろく
- 5) 『元治増補御書籍目録』
げんじぞうほごしょじやくもくろく
- 6) 『紅葉山文庫書目』
もみじやまぶんこしょもく

1は、夙に大庭脩氏により、解題を附して翻印せられ、また別に同氏の二著書にも略解題を掲げる。⁽²⁴⁾ 先行する長澤規矩也・青木正児両氏の見解を承けて三解題に大庭氏が陳べるところに拠れば、この目録は富士見亭文庫時代（慶長七年（一六〇二）頃～寛永十六年（一六三九）から享保七年（一七二二）までの紅葉山御文庫の漢籍の蔵書を、いろは順、同項目内では収書年代順に排列したもので、長崎の書物改役向井氏と関係するという。東北大学狩野文庫と静嘉堂文庫に各一冊が蔵され、関連史料が長崎市立博物館蔵長崎聖堂文庫にあるとのことだが、筆者はいずれも未見。

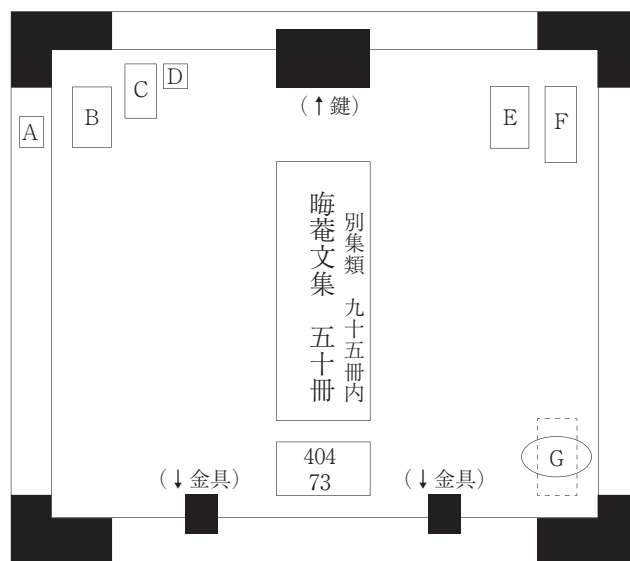
2は、鶴見大学図書館に蔵され、全六冊。さいきん『桜田御文庫と新井白石』で影印された。⁽²⁵⁾ 同書の解説では全体が桜田御文庫本の目録と解されているが、その実、前五冊が紅葉山御文庫の、最終冊が「桜田御文庫御書物」と「御小納戸ヨリ御預御書物」（將軍の御側にありたる書物ならん）の目録である。第六冊第三三丁裏の月光院への貸出の注記が『御書物方留牒』により

裏付けられ、正徳六年（＝享保元年）の情報が反映されていることが分かるから、この冊の原成立はこれ以前だろう。⁽²⁶⁾ また、第五冊四六丁表にも「月光院様へ正徳六年上ル、」の注記が見え、最終冊以外も正徳六年（＝享保元年）以前の成立と言えそうである。また他に、「今度吟味上候処」云々の注記が何ヶ所もあり、吉宗が將軍就任直後御書物奉行に調べさせた痕跡かと推する。⁽²⁹⁾ それに拠ってこれを観れば、2の原形は、全く失われたと考えられていた綱吉代始の、延宝八年（一六八〇）の書目とみるのが至当である。いずれにせよ正徳以前の紅葉山御文庫の総目録たること疑いない。なお、『官庫書籍目録』という書名は、あるいは延宝の原題かもしれぬ。何となれば『寛政重修諸家譜』鳳岡の項に「十月十六日、官庫書籍の目録を調進す、」（傍点筆者）とあるからである。鶏が先か卵が先か。また、国立国会図書館蔵『官庫書籍目録』は同名異書。⁽³¹⁾

3は、現在内閣文庫に蔵されるもので（請求番号219-10185）、⁽³²⁾ 文化十一（一八一四）～天保七年（一八三六）の編集に繋り、漢籍部のみ存する。内閣文庫本はその清書本とされる。⁽³³⁾ 三冊。具さに関すれば、後掲表1の如し。これに全く欠けたる御家部国書部凡例総目一冊・彙刻類目第一冊（思えらく彙刻書目総目・経・史部ならん）・来歴志四冊（『始末記』による）・始末記一冊（同）と御家部国書部都合四冊（『始末記』より逆算）とを加えれば全四二冊になり（『始末記』、殆ど『元治目録』と変らない分量となる。なお、鶴見大学図書館に、子部第二冊（巻八）の仮綴本一冊を蔵する（筆者未見。同館『日本の書目』（註（25）参照）による）。

4は、先行研究によれば、「大體、『佚存叢書』を載せてゐるので文化より後、而して、舊幕書目の最終である『元治増補御書籍目録』より、所収巻冊数な

〈図1〉 404-73 『朱子大全文集』の儉鈍（その1）の貼紙



☆各ラベル・貼紙の内容

- A 「集八号」
 - B 「集八號」
 - C 物品標示票
 - D 「17」
 - E 「在第一百一號上」
 - F 「集部拾一番」
 - G 長方形ラベルを剥がした上に
楕円ラベル「な/86/(朱) 1」
（「404/73」に書替え）
- } ←『明治廿三年図書録』第17号附属「古
 文書目録二〈在来之分〉」に対応
 ←図書寮時代のもの
 ←儉鈍の（函架ごとの）通し番号
 ←移管時の在来本番号
 ←『紅葉山文庫書目』に対応
 楕円ラベルは大正函号（『帝室和漢
 図書目録』に現函号（『和漢図書分
 類目録』）を上書き

どころから見て、前であらうと思はれる」のだという。⁽³⁴⁾ 御家部・国書部のみ存す
 る。大日本近世史料で附録として太田晶二郎氏蔵本を翻印。図書寮にも一本
 あり（函架番号101-132『重訂』楓山御書籍目録三冊⁽³⁵⁾。三巻本。上記二本
 とも巻上国書部家記類に一丁分と思しき脱がある（『元治目録』と突合せる
 と、『園太暦』と『薩戒記』の間に、慶長御写本『山槐記』以下二〇部の古
 記録が本来あるべき）。本文を閲するに、成立年代特定の鍵が、巻中雑類の
 「満文輯韻 二十一冊」だ。先に見たとおり同書は文化十三年成立、文
 政三年上呈、同四年収書ゆえ、本目録は須く文政四年以降の成立たるべきで
 ある。さすれば、3の御家部・国書部清書本が存せぬから確証こそないけれ

ども、『重訂目録』の編集の成果と見るのが妥当か。⁽³⁶⁾ ともかくも、3と4は
 恰も好し有無相補うのである。

5は、図書寮に蔵されるもので（函架番号451-51『紅葉山文庫御書籍目録』⁽³⁷⁾、
 元治元（一八六四）〜慶応二年（一八六六）の、江戸幕府最後の書目編集に
 繋る。四三冊。すでに陳べたとおり、図書寮本はその清書本とされる（詳し
 くは中村「宮内庁書陵部所蔵『楓山文庫御書籍目録』について」に就け）。
 なお内閣文庫にも明治の転写本一本がある（請求番号219-0193）。また、宮内
 公文書館蔵『秘閣図書目録』⁽³⁸⁾（識別番号70039-70048）は角書に
 「明治改正」とある5の改訂版だが、ヴォリュームも少ない上、内容面では
 劣化コピーにやや増補したに過ぎず、史料価値は低い。

6は、内閣文庫に三本、図書寮に一本が蔵されるが、その共通の祖本は内
 閣文庫の大学校旧蔵の六冊本で、第六冊末、星野恒博士の識語に、「右ハ、
 元楓山本大史江引渡二付、桜井某江相渡候書目之扣（朱丸印「星野」）とあ
 り、明治三年（一八七〇）二月二十二日、紅葉山御文庫の蔵書が大学から大
 史局に所管が変ったのに際して、星野博士が引渡目録の控として作成したこ
 とが分かる。大史局に渡ったその親本（原本）の行方は知れない。他二本は
 それぞれ農商務省と教部省の写で、前者は一冊に合冊し、後者は中四冊を欠
 き存第一・六冊。その他内務省も明治七年に目録を写すが（『太政類典』第
 二編第四五巻）、存否未詳。図書寮本（函架番号102-178）⁽³⁹⁾は大正十二年（一
 九二三）写。この目録は、『元治目録』と分類がやや異なり、明治に入って
 から度々動いているらしい御文庫本の、明治三年段階での管理状況を反映す
 るものと思しい。なお、一応国書と四部・附存と分類されてはいるものの、
 整然としているとは言えず、寧ろぐずぐずである。この目録は必要に迫られ

て実態を露にしたものだから、保管・移管を考える上では却って大変参考になる。見ていて興味深いのは、この時の番号が、実際図書が保管されている俵匳の貼紙と一致している点である。たとえば、「晦菴文集」との貼紙のある俵匳（上段図1）には『朱子大全文集』（函架番号404-73。書名変更さる）がそのまま入っていて、蓋に「集部拾一番」との貼紙があるが、『紅葉山文庫書目』の第五冊、集部一―番には果して「晦菴文集」とあるのだ。⁽⁴⁴⁾

さて1と6は別にして、2、3・4、5の四（三）種は、幕府自身の編集に繋るが、2と3・5とで目録そのものの「整然性」に大きな差が認められることは、この間に編集態度ががらりと変ったことを如実に示しており、実に興味深い。

なお、この他に『文化三年丙寅十二月以来新収書目』（『化政新収書目』『新収書目通覧抄』）なるものもあつて（内閣文庫蔵、請求番号218-150）、福井氏により翻印せられている。⁽⁴⁵⁾ 3・4と5との間を繋ぐ、補遺・増補的な側面が強いようで、目録編集の谷間の様子を垣間見られる好史料。また、幕初の蔵書については、林羅山の『御本日記』⁽⁴⁶⁾が、貴重書については、近藤重蔵『楓山貴重書目』や田中光顕『古芸余香』⁽⁴⁶⁾（うち楓山本を扱った部分）がそれぞれ参考になる。

四、幕末・明治期の紅葉山御文庫——各論（2）

江戸幕府が斃れ、江戸城が明渡されると、幕府の図書館たる紅葉山御文庫も新政府に接收せられた。⁽⁴⁷⁾ これをはじめ大学校（大学）が、次で明治三年（一八七〇）二月大史局が（前述）、翌年同局廃止に伴い式部寮が管し、さら

にその翌年には歴史課（後に修史局、修史館と改称改組）に属することになった（『明治史要』など）。このように転々とするのに加え——さらに悪いことには——紅葉山御文庫の蔵書は政府の蔵書として各官庁等に貸出されることもあり、明治六年に官衙の集まる皇居（旧江戸城西の丸）が焼けたとき、貸出されていた一部の図書が烏有に帰したのである。⁽⁴⁸⁾

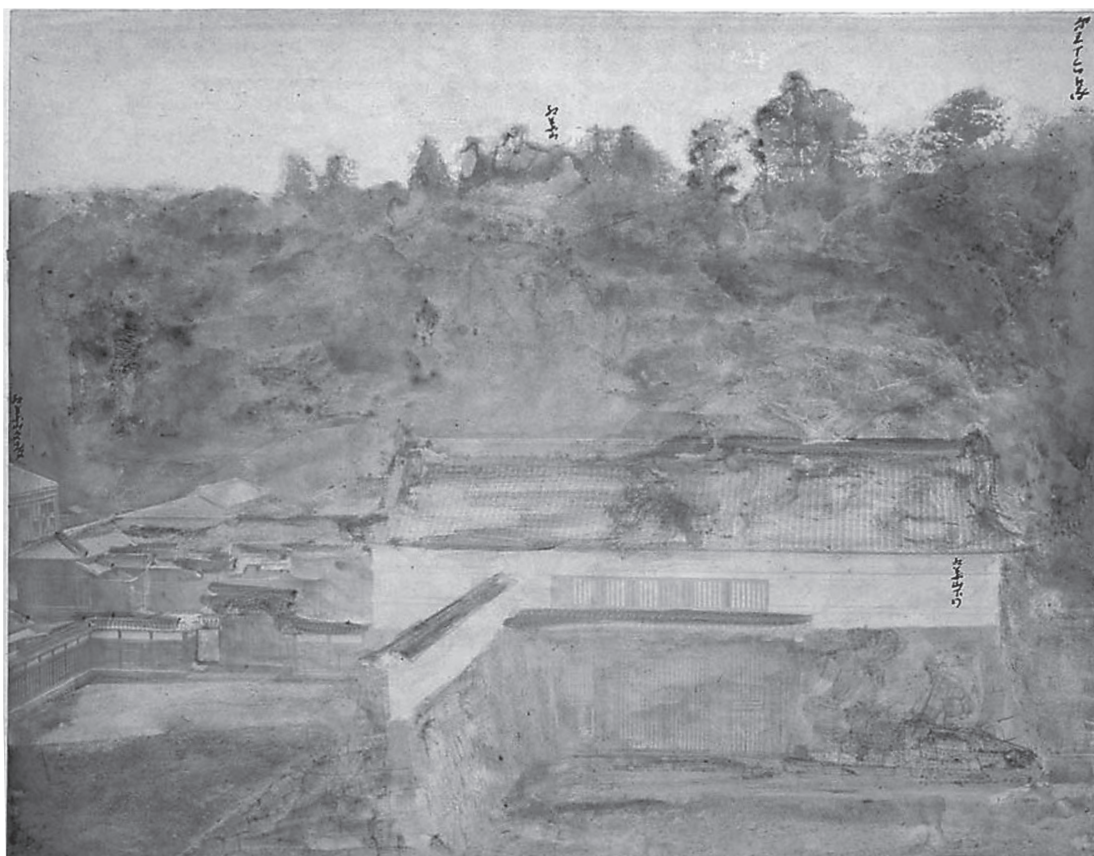
ところで、紅葉山御文庫は皇居西地区、現在乾通りとよばれている道の西側の、宮内庁総合倉庫（やや南側）のあたりに建っていた。明治初期の姿を伝える貴重な写真が次頁の図2だ。

図2は蜷川式胤等『旧江戸城写真帖』⁽⁴⁹⁾（東京国立博物館所蔵。列品番号P-419）第三六図に見える紅葉山御文庫周辺の写真である。建物に「紅葉山文庫」と墨書注記されているが、Bに拡大した、左端の建物が明治四年当時の書庫だ（図3に明治六年「皇居之図」をもとにした建物の配置図を示したが、図2-Aと図3とを見比べれば確かだと容易に理解されよう）。

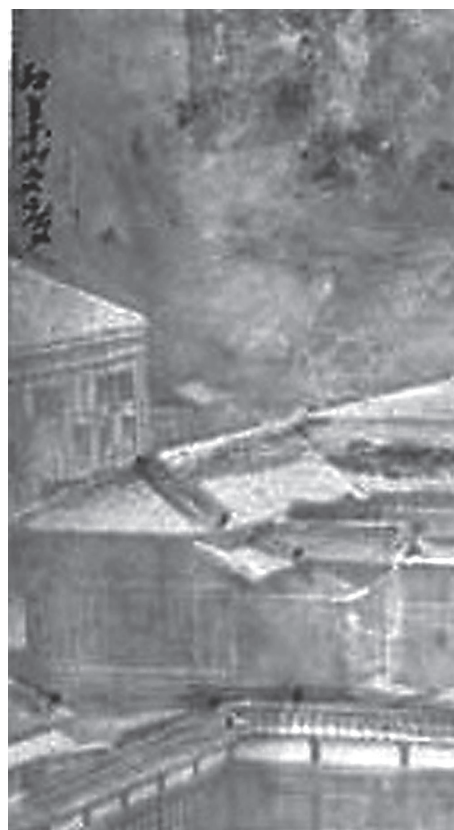
図3より明らかのように、明治六年時点では、「土蔵」と表現される蔵は全部で五棟である。福井氏の整理によると、紅葉山の「御宝蔵」区域⁽⁵¹⁾には、嘉永四年（一八五二）段階で、書庫四棟（うち一棟は納戸蔵と兼用）、具足蔵二棟、鉄砲蔵一棟の七棟で構成されるべきにもかかわらず、その位置・用途等についても不明な点や歴代の絵図との矛盾も多い。⁽⁵²⁾

さて、明治八年四月の「皇居之図」（国立公文書館蔵。「公文附属の図第二八号」。請求番号附A00028100）を見ると、既に図3という土蔵Eが失われているが、他の建物は従前どおりのようだ。また明治十一年や十三年、十四年に紅葉山御文庫の曝書のため吏員の坂下門通行に際し届出があり（『公文録』明治十一年第九卷・同明治十三年第一八一卷・同明治十四年第四

〈図2-1A〉『旧江戸城写真真帖』第三六図（全体）



〈図2-1B〉紅葉山御文庫部分拡大（上図左端部分）

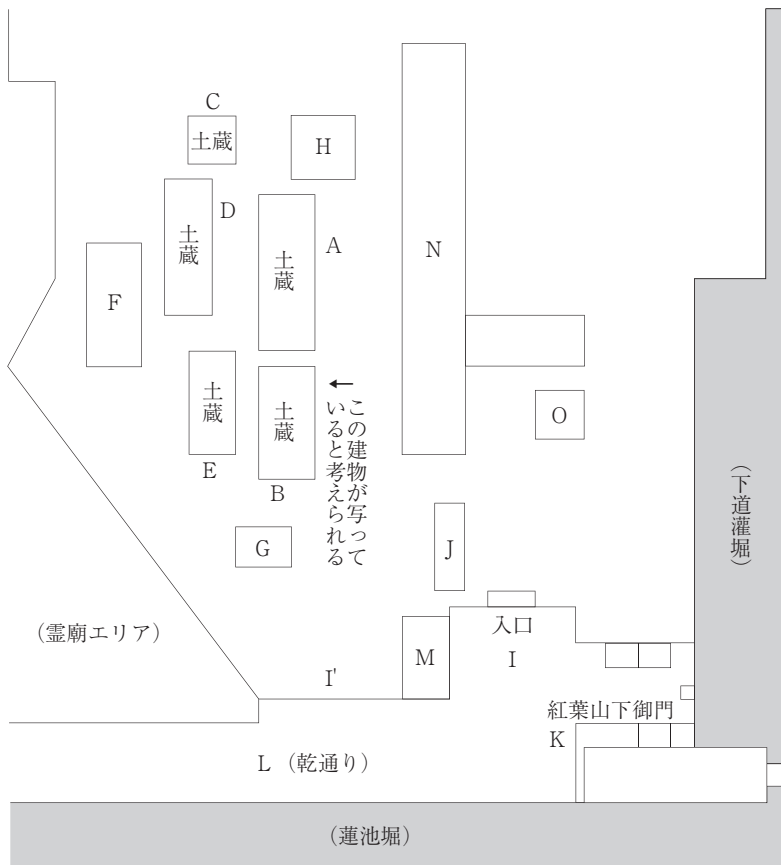


卷・『太政類典』第四編第一〇巻など）、かつ御文庫の窓銅戸の紛失⁽⁵⁴⁾などが話題になっているから（『公文録』明治十一年第九巻・同明治十二年第五巻）、土蔵Eを除く建物と書物はこの当時従前どおりとみてよい。

ところでこの間明治十二年十一月中旬に御文庫の地所建物が太政官正院から宮内省に移管されているが、先んじて太政官書記官局記録部から修史館に「楓山文庫」⁽⁵⁵⁾が交付され（『太政類典』第三編第四巻）、次で宮内省が「楓山文庫構内」に建物を設けている（同）。

そして明治十七年六月後半、皇居造営に際して「紅葉山下御文庫」返附につき宮内省から内閣書記官局に照会があり、同年十一月二十九日に修史館より内閣書記官局に「悉皆運搬相済」し⁽⁵⁶⁾「引払」ったと報告された（『公文録』明治十七年第一七六巻）。この時、空の土蔵五棟を引渡すとの文言があり、先に述べた明治六年時点での「土蔵」五棟と一致するが、既に土蔵Eは失わ

〈図3〉明治6年紅葉山御文庫周辺模式図



国立公文書館蔵「公文附属の図・12号 皇居之図」（明治6年5月25日，請求番号：本館-2A-030-03・附A00012100）により作製。括弧のない名称はこの公文書の記載のまま。

建物の位置・大きさこそ違えど，この敷地の形状は，正徳頃から現在まではほとんど変化がない。ことに上の地図と現在では全く変化が見られない。

撮影方向

☆各建物の比定。

- A) 「土蔵」。正徳・安政図「御具足蔵」，化政図「御召御具足蔵」に相当。
- B) 「土蔵」。正徳図「御書物蔵」，化政図「東御書物蔵」・安政図「御書物置」に相当。
- C) 「土蔵」。正徳図に「御書物蔵」とある位置に立地。
- D) 「土蔵」。化政図「御納戸／御書物蔵」（安政図名称不記）。
- E) 「土蔵」。正徳・安政図「御鉄砲蔵」「御具足蔵」，化政図「新御書物蔵」「数御具足蔵」の位置に立地（各図2棟あり）。「新書物蔵」の可能性もある。
- F) 明治6図名称不記。化政図「御宝蔵番所」（正徳の「上番所」に相当）。
- G) 明治6図名称不記。正徳・安政図「番所」，化政図「御書物会所」。
- H) 明治6図名称不記。もと敷地外にあった，化政図「御具足蔵」，安政図「御宮物置」か。
- I) 「入口」。
- I') 正徳図「くら御門」，化政図「御宝蔵入口門」，現在の「局門」の位置。明治8図には門あり。
- J) 明治6図名称不記。化政図「御宝蔵入口番所」，安政図「番所」か。
- K) 「紅葉山下御門」。正徳・安政図同然。
- L) 明治6図名称不記。正徳図「道」。現「乾通り」。
- M) 明治6図名称不記。化政図「御三家休息所」（正徳・安政図もほぼ同）に相当か。
- N) 明治6図名称不記。紅葉山霊廟の下御供所と役僧部屋に相当か（正徳・化政図）。
- O) 明治6図名称不記。安政図の「御門跡御部屋」に相当か。

※ 正徳図＝「正徳四甲午六月紅葉山惣指図」（東京都立図書館），化政図＝「紅葉山図」（国立国会図書館），安政図＝「楓山図」（東京大学附属図書館），明治6図＝「公文附属の図・12号 皇居之図」（国立公文書館），明治8図＝「公文附属の図・28号 皇居之図」（国立公文書館）

以上より，明治十七年以前，紅葉山御文庫の建物は——全くそのままと
は依然謎である。

いう訳にはゆかぬようだが——大略江戸時代以来のものをういていたと結論
してよからう。福井氏が『紅葉山文庫』でさらりとお書きのところを追えば
このようである。

なお蛇足ながら、「土蔵」が悉皆取壊されて後，跡地は「女婦部屋」等の

敷地の一部となり、現在では宮内庁女子職員宿舍の敷地の一部等となっているように見受けられる。乾通りに面した所謂局門つばねもんは「御宝蔵入口門」の位置に建てられたものである。

(史部に続く)

注

- (1) 『書陵部紀要』六七(二〇一六年)「彙報(図書課関係)八 組織変更」参照。
- (2) 本目録に関しては、中村一紀「宮内庁書陵部所蔵『楓山文庫御書籍目録』について」(『日本歴史』七一一、二〇〇七年)を参照。
- (3) 移管時の目録としては、『明治二十三年図書録』(識別番号乙274)第一七号所収のものがある。目録自体の内容は、平井芳男・長澤孝三「明治二十四年宮内省に移管した内閣文庫本について」(『北の丸』一三、一九八〇年)に影印版が載る「公文類聚」第一四編卷一七の目録と同じ。但、今回は、『元治目録』の分類の方が適切だと判断した場合、移管時の分類よりも優先しているものもある(なお、経部にはそのようなものはなかった)。
- (4) この他、二部三八点(『欽定篆文』四書)〔『欽定篆文』六経〕が御文庫本(『元治目録』にいう『篆文四書五経』)に当りそうだが、確証はなく、後考を期したい。
- (5) 『明治二十五年図書録』(識別番号乙276)第一二号。なお、その他考えうる移管基準につき、平井・長澤「明治二十四年宮内省に移管した内閣文庫本について」に考察あり。
- (6) 経部七五部のうち二部は、その後それぞれ統合整理され結局七三部に落ち着いた。また表には明治二十四年より前に移管されていた一部を加えたので、計七四部になっている。なお『来歴志』所載二六部は統合整理を経て現在二五部である。
- (7) 『附釈音礼記註疏』は和装・大本・一二冊。文禄・慶長頃清原秀賢令書写。外題「禮記註疏」、内題「附釋音禮記註疏」だが、冒頭に「禮記正義序」を附す

ため『重訂目録』『元治目録』『来歴志』で「礼記正義」として著録され(その判断自体は正しい)、外題と『来歴志』所載書名との相違から『来歴志』著録書と認定できず移管対象にならなかったと推する。なお『来歴志』では蔵書印について朱方印「清原/秀賢」を宣賢に誤り、朱壺印「清原」(首冊首)と黒八角印「司天台」下の朱長方印(「天師明経儒」カ)を見落しており、また影写本でもない。ちなみに当該書は、『来歴志』では「別本」扱いだが、『元治目録』本文では別本扱いではない(「別本」とされるのが影足利本)。この齟齬は『重訂目録』以来のことである。

- (8) 『周易伝義大全』の書誌は以下のとおり(法量はセンチメートル。蔵書印の丸囲み数字は図書寮叢刊『書陵部蔵書印譜』(上・下)による。以下同)。
宮内庁書陵部図書寮文庫蔵。函架番号401-13。線装・縦長本・一三冊。明・胡広等撰、朝鮮前期刊。香色正繁文表紙30・5×19・5(五ツ目綴)。左肩無辺題簽墨書「周易傳義大全(一)(廿三之四/終)」18・0×3・9。内題「周易傳義大全卷之一(二十四)」。四周双辺有界10行22字、24・0×16・6。注小字双行、句点あり。墨・朱書入あり。尾題「周易傳義大全卷之一(二十四)」。文之玄昌識語「文禄癸巳之春、予偶行於一浦、遇自朝鮮而來帰者之齋持經史(々々)紛失而無全一部者、其中有周易伝義大全三冊、予即求之、至於他邦、又求一二冊、猶未足者、令人写之、爾来研朱点之、焚香誦之恒兀々、以窮七年矣、且復忘其膚浅、妄加倭点、吁我不才、未得於辞、況於通意乎、所謂蚍蜉撼樹、精衛填海之比、而多見其不知量也、後之人、与我同志者、校之正之幸也、/(低1格)慶長四年己亥春二月吉辰、此時在城州伏見島津氏邸第畢功矣、(隔1格)隅州正興文之玄昌書之、(第一一冊)。惟方正円識語「周易伝義首卷諸篇及係辞以下、予雖僭偷、而妄加倭点、識者正其非者幸也、/寛永丁卯仲冬之日(隔2格)惟方正円書」(第一冊)・「周易伝義大全、吾文之老漢、加倭点者、只六十四卦、而不及繫辞以下、与首卷諸篇、豈非闕乎、予雖僭偷、而妄加倭点、以補之、無所逃罪、後來學者、無以予之倭点、誤為老漢之倭点者可也、/(低1格)寛永四年丁卯仲冬之日、海西破納(挿入)「惟方正(朱印)」書于武之江城」(第一三冊)。惟方朱筆識語「此一冊、倭

点正円加之、莫与老師和点一様看、」(第二冊、墨取消線にて抹消)・「此一冊、倭点正円漫加之、觀者勿做老師之点、」(第一三冊、同前)。第七冊挟込み一紙「周易伝義／十三冊(書横) まへ三所／破一丁／其外くるしからす」。秘閣圖書之章①・帝室圖書之章⑤・朱長方印「丁好徳／希迪章」(篆文陽刻) 3・0×2・3。図書寮ラベル。

(9) 『御覽』易經揆一の書誌は以下のとおり。

宮内庁書陵部図書寮文庫蔵。函架番号401-52。線装・縦長本・一〇冊。清・梁錫璵撰、乾隆十六年刊。黄色無地表紙26・2×16・3(二本取康熙綴)。左肩双辺題簽「易經揆一(共十本)一(一十)」(印刷枠内墨書、「共十本」は首冊のみ) 19・8×3・1。朱刷封面。清高宗上諭(乾隆十四・正・二)・保拳・高宗上諭(乾隆十六・閏五・十八)・凡例あり(いずれも版式本文同然)。内題「易經揆一卷一」。四周双辺有界10行21字、18・4×12・7。尾題なし。後付等なし。識語・奥書等なし。毛利高標①・秘閣圖書之章①・帝室圖書之章⑤・朱長方印「第津高氏監藏」(篆文陰刻) 3・3×2・3。図書寮ラベル。

(10) 唐人のものか。さいきん、この蔵書印が捺された本を偶々見つけたので購得したところ、『御覽』易經揆一同様首冊初丁右隅に(のみ)捺されていた。『万充宗先生經学五書』なる書物で、清・乾隆二十六年(一七六一)刊の五經の注釈書である。なお図書寮本でこの蔵書印の捺されたものに、『三經附義』(函架番号401-49)および『嚴太僕詩集』(同555-83)がある(いずれも佐伯毛利本で、捺印位置は同じ)。また、東京国立博物館蔵『竹雲題跋』(乾隆三十二年序)にもこの蔵書印が捺されているようである(未見)。

(11) 『禪菴禮經藏本』の書誌は以下のとおり。

宮内庁書陵部図書寮文庫蔵。函架番号401-60。線装・半紙本大・四冊。康熙十五年(一六七六)清・韓千秋撰、詩政堂刊。灰茶色無地表紙22・8×15・6。左肩無辺黄色絹題簽「禪菴禮經藏本 孝(・悌・忠・信)」17・2×2・9。封面、康熙十五年孫(在豊○康熙九榜眼)序・韓(応恒○韓千○秋宗侄)序・施(景麟○杭州人、順治四知東莞県事)序・札経篇次総序(目録+撰者自序)あり。内題「禮經卷一(一四十九)」。四周单辺有界

11行22字、18・1×12・8。句読点・傍点・圈点・声点あり。注小字双行。版心白口单黒魚尾、柱題「禪菴禮經藏本」。裴後述(跋)あり。秘閣圖書之章①・帝室圖書之章⑤印。図書寮ラベル。原帙入。なお、図書カードには「康熙十九年木版」とある。

(12) 『七経孟子考文』の書誌は以下のとおり。

宮内庁書陵部図書寮文庫蔵。函架番号401-81。和装・大本・三三冊。享保十一年山井鼎撰。縹色亀甲繫飛龍文艶出表紙28・2×18・5(二本取、綴糸紫、浅葱色角裂存)。左肩双辺書題簽「七経孟子考文(周易上(孟子下))一冊(三十三冊)」19・3×4・1(ヤケ痕あり)。物茂卿(荻生徂徠)享保十一年正月十五日序(墨書匡郭○四周双内墨書、5行14字、朱方印二顆押捺)・凡例(印刷匡郭○四周双内墨書、9行20字)・総目(同、每半9行(各行字数不定))あり。本文書式四周双辺有界9行20字(印刷匡郭内墨書、「疏」「経」等白抜部分押捺)、21・6×13・8、注小字双行、まま朱筆あり(補遺編集関連か)。秘閣圖書之章①③・帝室圖書之章⑤印。図書寮ラベル。小口書「七経孟子考 幾」。

(13) 『圖書寮典籍解題漢籍篇』四五ページ。なお、京都大学本には「西條邸圖書記」の朱印が捺されているようである(大阪府立図書館『近畿善本展観目録』(一九三三年)三七ページ、および京都大学KULINE (http://kuline.kuilib.kyoto-u.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=v3search_view_main_init&block_id=251&tab_num=0&op_param=srhRevTagFlag%3Dtrue%26words%3D%25E4%25B8%2583%25E7%25B5%258C%25E5%25AD%259F%25E5%25AD%2590#caddb-RB00012961)による)。また、京都大学本はもと狩野直喜博士の蔵書であつたらしい(狩野『支那學文叢』(みずす書房、一九七三年)一二〇ページ)。

(14) 『七経孟子考文補遺』は(山井鼎原撰、)享保十四年荻生観等補遺。福井氏は補遺の清書本が内閣文庫に存すると書いているが(請求番号経77-2。福井『江戸幕府編纂物』(雄松堂出版、一九八三年)一九五～九九ページ)、同書は果して、『日記』同日条に、

浅黄土佐紙表紙、糸紫、

右、溜塗筆筒、あかね金物、摺板二枚在之、

鑑毫本相添、右御書物由緒之御書付巻通共二受取之、
近世史料

とある傍線部の形態的特徴に合致する(傍線筆者)。一方、図書寮にも明治二十二年以前に移管されたい『七経孟子考文補遺』の浄書本一本を有するが(函架番号54-60、三三冊)、表紙が絹張であるなど内閣文庫本と異なる。図書寮本は大序を欠く一方で、最終冊尾に享保十六年四月の荻生観識語を有する(内閣本は大序あり、末尾識語なし)。なお、『国書総目録』は図書寮本を原本、内閣文庫本を「享保一六版写」とする。

(15) 『満文輯韻』の書誌は以下のとおり。

宮内庁書陵部図書寮文庫蔵。函架番号401-75。和装・大本・二二冊(含散誤解二冊)。文化十三年高橋景保撰、同年浄書。黄色正繁文艶出表紙26・1×18・3(二本取左綴、浅葱色角裂存)。右肩金砂子無辺題簽墨書「満文輯韻 首(一)一十六」17・7×3・3。文化十三年三月景保序・凡例(ともに四周双辺有界8行15字(印刷枠内墨書)、19・7×14・7)・目録(同各行字数不定)・「十二字頭」(四周双辺無界每半7行各行字数不定(印刷匣郭内墨書) 19・5×14・7)。内題「満文輯韻卷之一(一)二十六」。本文書式四周双辺有界每半8行各行字数不定(印刷匣郭内墨書) 19・6×14・7、句読点・返点あり、㊦・㊧・㊨印等押捺、間々小字双行、ノドに墨書丁付。秘閣図書之章①・帝室図書之章⑤印。図書寮ラベル首冊表紙ハリ紙痕。小口書「満文輯韻 首(一)一十八」。

㊦『満文散語解』…和装・大本・二冊。外題「満文散語解上(下)」(題簽「輯韻」同然)。内題「満文散語解卷之上(下)」。序(書式「輯韻」序同然) 目録(書式散語解本文同然)・本文(四周双辺無界每半9行各行字数不定(印刷匣郭内墨書) 19・5×14・7)。小口書「満文散語解上(下)」。

(16) 移管時は別々に著録するが(『明治二十三年図書録』)、具体的な時期は未詳ながら、『帝室和漢図書目録』(宮内省、一九一六年)ではすでに統合整理されて

いる。

(17) 増訂本の書誌は以下のとおり。

宮内庁書陵部図書寮文庫蔵。函架番号401-75。和装・大本・一一冊。高橋景保撰、文政十一年写(未完)。黄色雷文繁龍丸文艶出表紙26・7×18・8(二本取康熙綴)。左肩打付書「増訂満文輯韻 一(一)十一」(但、第二〇・一一冊外題なし)。内題「増訂満文輯韻卷之一(一)十三」。四周双辺有界(印刷)、每半8行(各行字数不定) 19・6×14・4、㊦・㊧・㊨印押捺の他墨書。注小字双行、間々片仮名傍訓あり。柱「増訂満文輯韻(※)〔満字部立〕 幾(付)〔※初丁のみ〕巻(冊)」。尾題なし。各冊尾浄書日を記す——①「丁亥享念六」(文政十・十一・二十六)、②③なし、④「戊子如念五繕写畢」(文政十一・二・二十五)、⑤「戊子晚春念二浄書成」(文政十一・三・二十二)、⑥「戊子仲呂念二浄書成」(文政十一・四・二十二)、⑦「戊子中夏望日浄書成」(文政十一・五・十五) ⑧「戊子臯念九」(文政十一・五・二十九)、⑨「戊子林鐘念八」(文政十一・六・二十八)、⑩「戊子菊月朔旦浄書成」(文政十一・九・一朝)、⑪「戊子十月初八日浄書畢」(文政十一・十・八)。秘閣図書之章①・帝室図書之章⑤印。図書寮ラベル。首冊表と紙「廿六番」(朱筆)のハリ紙。小口書あり——①⑦冊次と満字部立、⑧⑩冊次のみ。

(18) これにつき、呉秀三『シーボルト先生』(吐鳳堂書店、一九二六年)所載の景保からの押収品リストには、「一、満文輯韻 一冊。」と見える(甲篇二三九ページ)。「一冊」なのが解せぬが。

(19) 森潤三郎『紅葉山文庫と書物奉行』(昭和書房、一九三三年)四二六ページ。なお呉氏も見解を同じうする(『シーボルト先生』甲篇七七〇ページ)。

(20) 『礼記正義』の書誌は以下のとおり。
宮内庁書陵部図書寮文庫蔵。函架番号401-84。和装・大本・三五冊。香色無地表紙26・8×18・6(康熙綴、角裂存)。左肩単辺刷題簽「禮記正義 一二(六十九七十)」(但、巻数は墨書) 18・2×3・2。内題「禮記正義卷第一(一)卷第七十」(尾題同然)。無辺無界8行15字、字高20・2、注小字双行、書入等なし。影足利

学校宋紹熙刊本。各冊末影写者名を記す（第一～一三冊「吉田直躬謄」、第一四～二四・三五冊「杉浦吉統謄」、第二五～三四冊「竹内道生謄」）。尾冊後遊紙2才林衡識語「礼記正義七十卷、宋紹熙年間槧本、藏在下野足利学校、其本每巻記上杉安房守憲実寄進、又記足利学校公用、字端刻精、実罕遺也、甲寅春奉^{（平世）}旨^{（平世）}撰書手、以影鈔之、迨丙辰春始竣功、点画位置皆依其旧、不差毫髮、其或有蝨蝕殘缺、輒照万曆刻本補之、但第三十三卷至第四十卷、原本久佚、豊後僧一華者、嘗写別本足之、今審其紙墨亦數百年外物、因併謄校上、／（行末）大学頭臣林衡謹記」、同後見返ハリ紙杉山精一識語「宋紹熙板礼記正義、現存足利学矣、永亨中管領上杉安房守憲実之所置、希世之宝冊也、寛政六年、大学頭林衡奉（隔1格）旨、令選善書者謄写、八年三月竣功、装釘三十五本、呈（隔1格）覽、享和二年十二月收儲、／（低10格）書写人名／（行末）火鎮役戸田大学寄騎吉田与四郎直躬／（行末）能勢甚四郎組徒士杉浦庄兵衛吉統／（行末）掘 求馬組徒士竹内十吉道生／右為後証、天保十二年辛丑七月涼曝之暇杉山精一識、」。秘閣圖書之章①・帝室圖書之章⑤印。圖書寮ラベル。

(21) 『四書白文』の書誌は以下のとおり。

宮内庁書陵部図書寮文庫蔵。函架番号506・32。線装・特大本・八冊。〔姜立綱〕写。茶色無地表紙45・0×29・3（紫糸二本取五ッ目綴）。左肩浅葱色吉祥文絹双辺書題簽「論語上（・論語下・大學全・中庸全・孟子卷一之四・孟子卷五之八・孟子卷九之十一・孟子卷十二之十四）」26・4×5・6。内題「論語卷上（・下）」「大學」「中庸章句」「孟子卷之幾」。四周及辺無界7行12字、29・4×22・3（匡郭墨書）。句読・声点の朱丸・節冒頭の朱大丸押捺。柱なし。尾題「論語卷上（・下終）」「大學終」「中庸章句終」「孟子卷之幾」。王世貞識語「故姜太僕立綱書此四子全文、句読各有圈甚精、当是^{（反總）}先朝春宮進読本也、結法円熟端勁妙、不可言初見絶、以為沈度学士書、徐覺其沈礫处、小露鋒鏖、乃敢定姜筆、噫嘻今何制、諸君不復能弁此矣、吳郡王世貞題^{（朱印）}」。趙用賢識語「語孟中庸大學、今世誦習編天下、然善本亦不易得、当由^{（補入）}『披玩』為常則精好、難繼學者、不無臨文之嘆、此帙乃張幼于所藏、龔山先生鑒定、以為姜太常筆、姜書法出沈学士度、為

（隔1格）本朝兩制、楷則或病其体多同、而格力不揚然、是書頗病、譌偽太常、此本如宿学老儒、雖姿字不至峻茂、而嚴正可畏、一展卷間、令人神暢義融法言、琅々若聖賢在目、余謬以為唯与太常書、為合作耳、吳郡趙用賢識^{（朱印）}」。秘閣圖書之章①・帝室圖書之章⑤・方印「王泰／吉印」（篆・陽、四周及辺）1・3×1・3（見返は黒印、題簽に朱印の上に黒印を再捺したものあり）。圖書寮ラベル。小口書「和合」。箱外法50・7×35・1、箱書「四書白文明姜立綱書八本」。

(22) 張幼^{（ちようよう）}于とは明の三張のひとり張獻翼^{（ちようけんよく）}のこと。その伝記については、林恵一「張幼于論」（『書陵部紀要』二〇、一九六八年）参照。

(23) 福井保「紅葉山文庫」（郷学舎、一九八〇年）一二五ページ。

(24) 大庭「東北大学狩野文庫架蔵の御文庫目録」（『関西大学東西学術研究所紀要』三、一九七〇年）・同『江戸時代における』唐船持渡書の研究（『関西大学東西学研究所、一九六七年）一一五～一一六ページ・同『江戸時代における』中国文化受容の研究（同朋舎出版、一九八四年）一八六～二〇五ページ。

(25) 鶴見大学図書館本「官庫書籍目録」の書誌は以下のとおり。

鶴見大学図書館蔵。請求記号029.8/K。和装・中本・六冊。〔江戸後期〕写。香色表紙20・3×13・0。左肩打付書「官庫書籍目録 幾」（最終冊のみ冊次を欠く）、各冊内容を外題右に書く。無辺無界每半6行（各行字数不定）。各冊墨付①47②34③88④72⑤69⑥34（内①～⑤は扉各一丁を含む）。朱長方印「鶴見大學／圖書館蔵」（篆文陽刻）、①～⑤各扉裏・⑥初丁裏に登録番号黒スタンプ押捺、鶴見大学図書館ラベル。なお同館によれば、昭和五九年購入という。それ以前の来歴は不明。また、早くも一九九五年に同館編集発行の『日本の書目』で写真と略書誌が紹介せられている。

(26) 新井白石記念館の設立を応援する会編集・発行、二〇一六年。解説二二九～七〇ページ、影印一七三～二三六ページ。

(27) 『桜田御文庫と新井白石』二三四ページ。

(28) 『御書物方留牒』享保元年六月八日条に、「一、桜田御本・御小納戸御本、不殘御目錄認差上ケ候様二、小笠原主膳殿被^レ仰聞候、依^レ之、右之御本控共不

「殘金兵衛方え致^レ持参^レ候、」とある、それに当るのだろう（但、十日条に「御小納戸御書物目録式冊」とあるのに注意）。なお研究史上、桜田御文庫本の目録作成は同年（正徳六〇享保元年）とされており（福井『紅葉山文庫』四一ページ）、これを指すものと思しい。

(29) 『日記』正徳六年六月十三日条に「今日より、御目録ト御筆筒引合改申候、冊数などの違ハ、付札いたし候様ニ申付候、」云々とあり、月光院への貸出し記録にせよ、吟味云々にせよ、これらの注記はもと付札だったものを写取ったとみてよからう。

(30) 延宝八年の目録に関連する史料として、人見竹洞「紅葉山御書庫日録」が夙に知られている（樋口秀雄「^{人見記}「紅葉山御書庫日録」」（『典籍』第一八号、一九五五年）・福井『紅葉山文庫』八九〜九〇ページ）。福井氏は『紅葉山文庫』でこれを林鳳岡の日記とするが、「余」（記主）と「林直民」（直民）は鳳岡の字）とが明らかに別人で、『竹洞全集』（国立国会図書館蔵、請求記号145-86）に収められている以上、竹洞の日記とみるのが妥当。この点『江戸幕府編纂物』にて修正しておられることに注意（同一五〇ページ）。

(31) 森氏によれば、「昌平坂學問所に下賜又は寄附の書名を録す」という（森『紅葉山文庫と書物奉行』二五〇ページ）。

(32) 『重訂目録』の書誌は以下のとおり。

国立公文書館内閣文庫蔵。請求番号219-0185。和装・大本・三十一冊。天保七年（一八三六）写。黄色小葵文艶出表紙29・3×19・8（二本取、浅葱色菱文角裂存）。左肩双辺題簽「重訂御書籍目録」（印刷枠内墨書）20・2×3・5、中央上部双辺副題簽9・2×11・5。内題「重訂御書籍目録卷之一（十三）」（子部まで）。四周双辺無界每半5行（各行字数不定）（注：彙刻部のみ四周双辺有界每半10行（各行字数不定）、注小字双行（間々三行）、印刷匡郭内墨書。各丁（袋）間紙入。蔵書印「日本政府圖書」「淺草文庫」。古分類ラベル・新旧内閣文庫ラベル・「類書」ラベル。表と紙右下「乙」（第一〜一五冊）・「甲」（第一六〜三十一冊）の朱字。小口書「重訂御書籍目録」。四帙入。内容細目三七ページ表1のとおり。

(33) 福井『紅葉山文庫』九四ページ。

(34) 大日本近世史料「御書物方日記 八」「重訂楓山書籍目録」例言。

(35) 図書寮本の書誌は以下のとおり。

宮内庁書陵部図書寮文庫蔵。函架番号101-132。和装・大本・三冊。近代写。丁子引表紙23・9×16・8。左肩双辺題簽「重訂」楓山御書籍目録 上（中・下）。内題「重訂楓山御書籍目録」。無辺無界每半10行（各行字数不定）。尾題「重訂楓山御書籍目録卷上（中・下）終」。奥書等なし。朱方印「春翠／文庫」（楷書陽刻）2・4×2・4（中島仁之助）・図書寮C印。図書寮ラベル。

(36) ところで、4は文政十一年収書の『増訂』満文輯韻（一一冊）を載せぬ。単に同書が未完のゆえかもしれず、これを以て4の成立を文政十一年より前に繋けるのは早計ではあるが、その可能性も視野に入れておく必要はあろう。

(37) 『元治目録』の書誌は以下のとおり。

宮内庁書陵部図書寮文庫蔵。函架番号451-51。和装・大本四三冊。江戸末期写。黄色小葵文艶出表紙29・1×19・7（浅葱色角裂存）。左肩双辺題簽「元治／増補御書籍目録」（印刷枠内墨書）19・7×3・3、中央上部双辺副題簽（印刷枠内墨書）8・8×11・1。目録本文四周双辺無界每半5行（各行字数不定、印刷匡郭内墨書）22・6×15・2（彙刻類：四周双辺有界每半10行（各行字数不定）、来歴志：四周双辺無界10行24字、始末記：四周双辺無界10行23字）。「統」字闕筆（避孝明天皇御諱）。各丁（袋）間紙入。宮内省図書印②。図書寮ラベル。なお、細目については三八ページ表2のとおり。

また、本書は『帝室図書目録』（一八八九年、宮内省）上巻「書目」の項に「^{元治}増補書籍目録^{写本}」一（部）四三（冊）（一）内引用者補」と著録さる。

(38) 宮内庁書陵部宮内公文書館蔵。識別番号70039-70048（旧函号102-131）。和装・大本・一〇冊。明治期写。宮内公文書館の簿冊情報では「文学御用掛編 明治写」といい、「侍講局」を作成部局とする（前者は『和漢図書分類目録』を踏襲か）。

なお本書は、『帝室図書目録』上巻「書目」の項に「^{明治}改正秘閣図書目録

内閣図書課撰 一「部」一〇「冊」(「」内引用者補)と著録さる。
写本

(39) 旧大学本の書誌は以下のとおり。

国立公文書館内閣文庫蔵。請求番号219-182。和装・大本五冊+半紙本一冊(共六冊)。明治三年写。香色無地表紙26.3×19.0(第一~五冊)、23.3×17.0(第六冊)。左肩無辺題簽墨書「紅葉山文庫書目」19.2×3.7(題簽末、書名下に「一(六)」の鉛筆書)。内題なし(但、各冊の分類内容を冒頭に記す。第三冊「改正学問所書目」とあり)。四周単辺有界、每半5行(各行字数不定)。第六冊のみ昌平学校野紙使用(四周単辺有界19.0×14.3)。朱符号(丸)あり。寄合書。尾題なし。「統」字闕筆(避孝明天皇御諱)。各冊内容①国書②経部③史部④子部⑤集部⑥附存。奥書「右ハ、元楓山本大史江引渡二付、桜井某江相渡候書目之扣(朱丸印「星野」)」。蔵書印「日本政府圖書」「内閣文庫」「浅草文庫」(各冊)、「大學校圖書之印」「紅葉山本」(第三冊のみ)、「書籍館印」「星野」(第六冊のみ)。後者表と紙、奥書末押捺のものと同じ。内閣文庫新旧ラベル(古いラベルを剥がした痕あり)。小口書「紅葉山文庫書目」。表と紙「共六」の墨書。第六冊表と紙函号下札。

※ なお冊次については、本稿では本来の順序に従う。すなわち、現在では第六冊「附存部」が半紙本とひと回り小さいので(おそらく管理上の措置として)第六冊を一冊目とする(ラベルも斯く改めらる)。

(40) 『太政類典草稿』第一五巻、官制、文官職制一。同第二六巻、官制、文官職制二。同第二七巻、官制、官庁制置一。同第二八巻、官制、官庁制置二。

(41) 旧農商務省本の書誌は以下のとおり。

国立公文書館内閣文庫蔵。請求番号219-183。和装・大本・一冊。明治前期写。香色無地表紙26.4×19.2。左肩双辺題簽「紅葉山文庫書目 全」(印刷枠内墨書)18.7×3.4。内題「紅葉山文庫書目」。無辺無界每半13行(各行字数不定)。朱符号、鉛筆書入あり。尾題「紅葉山文庫〇〇部 終」。国書・経・史・子・集・附存の六部分類(各部扉裏に目録「紅葉山文庫書目捷覧」を附す)。本奥書「右ハ、元楓山本大史江引渡二付、桜井某江相渡候書目之扣(朱丸印影「星野」)」。

蔵書印「農商務省圖書」(上に「消印」押捺)「太政官文庫」「内閣文庫」。内閣文庫新旧ラベル・古「和書門」ラベル。小口書「紅葉山文庫書目 全」。表と紙函号下札。

「農商務省圖書」印の使用期間が明治十四年四月~同二十年までとされるので(『改訂内閣文庫蔵書印譜』(一九八一年、国立公文書館)、書写年代も概ねその増補に収まろう。

(42) 旧教部省本「楓山書目」として登録せらる」の書誌は以下のとおり。

国立公文書館内閣文庫蔵。請求番号219-190。仮綴・大本・二冊(存第一・六冊)。明治期写。洋厚紙表紙27.3×20.0。左端打付書「楓山書目 壹(六)」、外題右に「国書ノ部(附存ノ部)」と墨書。内題なし。四周双辺有界每半8行(各行字数不定)20.9×14.5(神祇官野紙に墨書)。奥書等なし。蔵書印「神祇官文庫印」「教部省文庫印」「圖書局文庫」「日本政府圖書」。内閣文庫新旧ラベル、古「和書門」ラベル(赤斜線にて抹消)、内務省圖書ラベル(第一冊のみ)。表と紙右隅「共六冊」と墨書、それを朱線にて抹消し「二巻之内」と朱書。第一冊表と紙ハリ紙「共式本」/百一(墨書)、同函号下札。

(43) 圖書寮本の書誌は以下のとおり。

宮内庁書陵部圖書寮文庫蔵。函架番号102-178。和装・大本・六冊。大正十二年内閣文庫本謄写。茶色無地表紙26.6×19.3。左肩双辺題簽「紅葉山文庫書目」(印刷枠内墨書)20.6×4.6。内題なし(但、各冊の分類内容を冒頭に記す。第三冊「改正学問所書目」とあり)。無辺無界每半10行(各行字数不定)。朱筆書入れあり。各冊内容①国書②経部③史部④子部⑤集部⑥附存。本奥書「右ハ、元楓山本大史江引渡二付、桜井某江相渡候書目之扣(朱丸印影「星野」)」。宮内省圖書印①印(また、旧大学本の蔵書印「浅草文庫」「紅葉山本」の印影を写す)。図書寮ラベル。各冊表と紙右端「共六」墨書。

(44) 参考までに『紅葉山文庫書目』当該部を掲ぐ(第五冊)。

集部十一番別集類

晦菴文集 九十五冊内五十冊

(45) 「福井保」〔文化三年丙寅十二月以来新収書目（翻印）〕〔『北の丸』一〇、一九七八年〕。なお『化政新収書目』は、和装・半紙本・一冊、田安德川家・農商務省旧蔵。

(46) 図書寮の善本を扱った貴重書解題である（市島謙吉「幕府の蔵書は如何に取扱はれたか」〔『図書館雑誌』一四三号、一九三一年〕。函架番号102・142、一一冊。
(47) これより先、慶応二年（一八六六）に御書物奉行が廃止され、御書物方同心も昌平坂学問所支配となるが、その時を以て御文庫の廃止と見る向きもある（『日本大百科全书』「紅葉山文庫」（福井保））。

(48) なお、この時の焼失図書については、福井保「明治六年秘閣焼失書目」〔『北の丸』七、一九七六年〕に詳しい。

(49) 画像は、「東京国立博物館画像検索」(<http://webarchives.tnm.jp/ingsearch/show/CO030682>) による。

(50) 福井『紅葉山文庫』一三・一四ページ。

(51) 区域全体を指して「御宝蔵」と呼ぶ（図書寮文庫蔵『江戸城修覆持場絵図』（文政七年、函架番号271・503））。

(52) 森氏の指摘の如く、紅葉山の絵図はほとんど残っておらず（『紅葉山文庫と書物奉行』二二二ページ）。それでも管見に入った紅葉山ないしは御文庫の図としては、『紅葉山総絵図』（江戸東京博物館蔵、『大江戸と洛中』一四六ページ。江戸後期）、『紅葉山惣絵図』（同館蔵、同一四七ページ。江戸後期）、『江戸城惣郭地図』（同館蔵、同一四八ページ。江戸後期）、『江戸城修覆持場絵図』（前掲。図書寮文庫蔵）、『皇居造営録（紅葉山取調）明治十五年』附図（宮内公文書館蔵、識別番号434。明治十五年）、『紅葉山図』（国立国会図書館蔵、請求記号819・11。同館デジタルコレクションにて画像閲覧可。「御宝蔵地区」については森著書口絵に「紅葉山宝蔵構内図」として復刻。旧幕府引継書）、『楓山図』（東京大学附属図書館蔵、請求記号 鷗 G 28・14、鷗外文庫、森潤三郎旧蔵）、『紅葉山総絵図』（東京大学附属図書館蔵、請求記号 U 40・1582、南葵文庫旧蔵）、『正徳四甲午六月紅葉山惣指図』（東京都立図書館蔵、請求記号 東 6175・8。大日本近世史料『書物

奉行日記四』図版）『江戸城紅葉山図』（東京都立図書館蔵、請求記号 木 14・21・5）、『江戸城紅葉山図』（同館蔵、請求記号 木 19・11・3）、『公文附属の図』一二号および二八号「皇居之図」（国立公文書館蔵、請求番号 附 A 00012100・附 A 000028100）がある。

(53) この図を信用すれば、『公文録』にいう土蔵五棟は、図3のA～Eの全てではないことになる。これは火災で焼けたというより、紅葉山一帯の再利用（再開発？）に伴う撤去等の結果かと推する（皇居火災なら立地上——Eは「御宝蔵」地区の中央に位置する——他の建物も焼けていてしかるべきであり、また皇居火災で焼けた図書は福井氏の計上を信ずれば約5%にも満たず（福井「明治六年秘閣焼失書目」および同『紅葉山文庫』三三・一三三～一三四ページ）、土蔵ひとつ焼けた量とは言い難いからだ）。なお、明治一五～一七七年参謀本部陸軍測量局「五千分一東京図」には土蔵Eの位置に建物（土蔵かは不明）が見えるため明治八年図が誤っている可能性もあり、注意を要する。

(54) ちなみにこの文庫窓銅戸紛失は二階の窓だといひ、二階建てだったという文庫の構造（福井『紅葉山文庫』一五ページ・前掲図2）と一致する点にも注意。

(55) 修史館に交付されたものが本なのか建物なのかはよく分からぬが、その後の経過からするとその両方か。

(56) 『公文録』明治十六年第一六巻にいう旧紅葉山御文庫本国書の「乾門内文庫」に移転というのがそれに相当するのだろう。

(57) 『皇居御造営諸建物其他明細図―宮城内総図之部』（宮内公文書館蔵、識別番号 81348）。

〈表1〉『重訂御書籍目録』（内閣文庫蔵，請求番号219-185）総目

※注（32）

冊	分類	内 容
1	〔漢籍〕	凡例・総目
2	經部	易類・書類・詩類・礼類・楽（書）類・春秋類・孝經類
3		經總類・四書類・小学類
4	史部	正史類・編年類・紀事本末類・別史類・雜史類・詔奏類・実録類・伝記類・譜牒類・史抄類・載記類・時令類
5		職官類・政書類・吏務類・目錄類・史評類
6		地理類上
7		地理類下
8	子部	儒家類・兵家類・法家類・農家類
9		医家類
10		天文算法類・術数類・藝術類・譜録類・雜家類
11		類書類・小説類・积家類・道家類
12	集部	楚辭類・別集類上
13		別集類下・餘集類
14		總集類・閏集類・制科藝類・賦類・詩文評類・詞曲類・四六類・尺牘啓箋類
15	附存部	演義類・雜記類・雜劇類・韓人著撰類・満文類・蛮書類
16	彙刻類	子部1
17		子部2
18		子部3
19		子部4
20		子部5
21		子部6
22		子部7
23		子部8
24		子部9
25		子部10
26		子部11
27		子部12
28		集部1
29		集部2
30		集部3
31		集部4

〈表2〉『楓山文庫御書籍目録』（『〈元治増補〉御書籍目録』，函架番号451-51）総目

※注（37）

冊	分類	内 容
1	四部	凡例・総目
2	御家部	凡例・目録・御事蹟類・日記類・故事類・諸家譜類・寺院類・地理類・外国類
3	国書部上冊	凡例・目録・神書類・帝紀類・家記類・公事類・律令類・官位類・氏族類・天文類・地理類・詩文類
4	国書部下冊	和歌類・仮名類・管絃類・武家類・軍記類・医書類・仏書類・雜類・附録類
5	御家部番外 国書部番外	御文書類・御書物類・朝鮮書翰・同御返翰・琉球書翰・同御返翰〈同箱形・案〉 古文書類・諸書物類
6	經部	易類・書類・詩類・礼類・樂書類・春秋類・孝經類
7		經總類・四書類・小学類
8	史部	正史類・編年類・紀事本末類・別史類・雜史類・詔奏類・實錄類・伝記類・譜牒類・史抄類・載記類・時令類
9		職官類・政書類・吏務類・目録類・史評類
10		地理類上
11		地理類下
12	子部	儒家類・兵家類・法家類・農家類
13		医家類
14		天文算法類・術数類・藝術類・譜録類・雜家類
15		類書類・小説類・釈家類・道家類
16	集部	楚辭類・別集類上
17		別集類下・餘集類
18		總集類・閩集類・制科藝類・賦類・詩文評類・詞曲類・四六類・尺牘啓箋類
19	附存部	演義類・雜記類・雜劇類・韓人著撰類・滿文類
20	彙刻類	御家部・国書部
21		彙刻書目総目・經部・史部
22		子部1
23		子部2
24		子部3
25		子部4
26		子部5
27		子部6
28		子部7
29		子部8
30		子部9
31		子部10
32		子部11
33		子部12
34		集部1
35		集部2
36		集部3
37		集部4
38	来歴志	来歴志上
39		来歴志下
40		御家部
41		国書部
42	御家部外品目録	
43	始末記	

【表の見方】

本来、目録とは分類ごとに排列するものであるが、四部分類以下は、利用や図書寮における整理・管理状況への理解の便を考えて、函架番号（CZ Number）順に排列した。各欄については以下のとおりである。

- **現行書名** 現在『和漢図書分類目録』およびそれに基づく「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」（URL：<http://toshoryo.kunaicho.go.jp/>）所載のもの。「一名（Another Name）」・「附（員数外の附属物等）」を附載。
- **刊 写** 刊本・写本の別と、その年代等。括弧内はそれに加えて記述すべき事項。
- **員 数** 形態の違うものについては合計を記してある（たとえば47巻1冊の場合「48（点）」）。
- **御書籍目録**
 - 書名 現行書名と異なる場合が多いため著録。
 - 分類 『元治目録』での分類。
- **来歴志所載** 『来歴志』所載の有無。
- **収書年次** 各図書の紅葉山御文庫への収書年次（一部未確定・推測等あり）。
- **登録番号** 各図書の登録番号（通称「台帳番号」）。
- **引継時号数** 内閣記録局より引継いだ際の、「在○号」「購○号」の如き、在来本（江戸幕府等からの移管本）と、購入本（内閣で購入した坊間流出本）との区別と号数（本稿関係では「在」のみ）。
- **旧 函 号 1** 図書寮では、引継図書に対し新たに種別・番号を附

して管理した（おおむね引継時のかたまりのまま）。甲種は貴重書、乙種が普通書と考えられ、内閣移管本は甲種に分類。

- **旧 函 号 2** 大正五年『帝室和漢図書目録』時点での函号。
- **旧 御 物** 戦前期に御物扱いか否か（現在は全て御物に非ず）。
- **家 別** 現在の家わけを示した。
略号：秘Ⅱ秘閣本・佐Ⅱ佐伯毛利本
- **印譜「紅葉山文庫」** 『書陵部蔵書印譜』『紅葉山文庫』の項目所載の①～③の「秘閣図書之章」と④「紅葉山本」の押捺状況。
- **備 考** その他必要と思しき事項。

来歴志 所載	収書年次	登録 番号	引継時 号数	旧函 号1	旧函 号2 (大正)	旧御物	家別	印譜 「紅葉山 文庫」	備 考
○	正徳3 (桜)	6658	在1	甲401	な32	○	秘	①	
○	文政11 (佐)	6660	在1	甲401	な32	○	佐	①	
○	幕初 (御)	6661	在1	甲401	な32	○	秘	①	
○	文政11 (佐)	6662	在1	甲401	な32	○	秘	①	
×	寛永20 (御)	6664	在1	甲401	な32	○	秘	①	
○	*享保元以前 (官)	6665	在2上	甲402	な33	○	秘	①	
×	承応2 (御)	6666	在2上	甲402	な33	×	秘	①	
×	寛文11 (御)	6667	在2上	甲402	な33	×	秘	①	
○	文政11 (佐)	6668	在2上	甲402	な33	○	秘	①	
○	幕初 (御)	6669	在2上	甲402	な33	○	秘	①	
○	嘉永2 (新)	6670	在2上	甲402	な33	×	秘	①	
○	享保元以前 (官)	6671	在2上	甲402	な33	○	秘	①	「旧題魯論」(元)
×	寛永20 (御)	6699	在7 →在3	甲411 →404	な34	○	秘	①	
×	文政11 (佐)	6673	在3	甲404	な34	○	秘	①	
○	文政11 (佐)	6676	在3	甲404	な34	○	秘	①	
○	文政11 (佐)	6675	在3	甲404	な34	○	秘	①	
○	文政11 (佐)	6677	在3	甲404	な34	○	秘	①	
○	(承応2～) 享保元 (官など)	6678	在3	甲404	な34	○	秘	①	戴笠旧蔵
×	貞享2 (御)	6704	在8	甲412	な34	×	秘	①	
×	*享保元以前 (官)	6691	在7	甲411	な35	○	秘	①	
×	享保元以前 (官)	6692	在7	甲411	な35	○	秘	①	国活 (元)
×	幕初 or 慶安4 (御)	6694	在7	甲411	な35	×	秘	①	
×	文政11 (佐)	6695	在7	甲411	な35	○	秘	①	
×	*享保元以前 (官)	6697	在7	甲411	な35	○	秘	③	
×	享保元以前 (官)	6696	在7	甲411	な35	○	秘	①	
×	幕初 (御)	6698	在7	甲411	な35	○	秘	③	
×	*享保元以前 (官)	6701	在7	甲411	な35	○	秘	①	孝経清家抄 (官) カ
×	天明4以前 (日)	6702	在7	甲411	な35	○	秘	①	
×	文政11 (佐)	6715	在8	甲412	な36	×	佐	①	
×	万治元 (御)	6706	在8	甲412	な36	×	秘	①	
×	寛文11 (御)	6705	在8	甲412	な36	×	秘	①	
×	文政11 (佐)	6709	在8	甲412	な36	○	秘	①	
×	文政11 (佐)	6708	在8	甲412	な36	×	秘	①	
×	享保元以前 (官)	6716	在8	甲412	な36	○	秘	①	
×	明暦元 (御)	6714	在8	甲412	な36	○	秘	①	
×	明暦元 (御)	6707	在8	甲412	な36	×	秘	①	
×	文政11 (佐)	6711	在8	甲412	な36	○	秘	①	
×	幕初 or 慶安4 (御)	6710	在8	甲412	な36	○	秘	①	
×	文化4 (化)	6713	在8	甲412	な36	×	秘	①	
×	貞享3 (御)	6712	在8	甲412	な36	×	秘	①	
×	寛永16 or 19 (御)	6721	在9	甲413	な37	×	秘	①	
×	天保7～元治2 (重 + 元)	6717	在9	甲413	な37	×	秘	①	
×	文政11 (佐)	6720	在9	甲413	な37	○	秘	①	
×	万治3 (御)	6722	在9	甲413	な37	×	秘	①	
×	文政11 (佐)	6727	在9	甲413	な37	×	秘	①	
×	文政11 (佐)	6726	在9	甲413	な37	×	秘	①	
×	享保元以前 (官)	6724	在9	甲413	な37	○	秘	①	
×	文政11 (佐)	6718	在9	甲413	な37	○	秘	①	もと401-65 (統合整理)
×	文政11 (佐)	6719	在9	甲413	な37	○		①	
×	文政11 (佐)	6723	在9	甲413	な37	×	秘	①	
×	幕初 (御)	6725	在9	甲413	な37	○	秘	①	
×	享保元以前 (官)	6731	在10	甲414	な38	○	秘	①	

図書寮蔵紅葉山御文庫本目録（一）経部

函架 番号	現行書名	刊 写	員数	〈元治増補〉(楓山文庫)御書籍目録	
				書 名	分類
401-13	周易伝義大全	朝鮮版	13	周易大全	易
401-15	詩緝	元版 (大 徳 3)	15	詩緝	詩
401-16	詩伝	朝鮮版	10	詩経集伝	詩
401-17	四書章図纂釈 一名：四書章図櫟括総要	元版 (後 至 元 3)	3	四書章図総要	四書
401-18	家礼	朝鮮版	2	家礼	雑礼
401-21	礼記集説	元版 (天 曆 2)	4	礼記集説	礼記
401-22	尚書要旨	清版	8	尚書要旨	書
401-23	像象〈易六卷〉	明版 (万 曆 41)	4	易象抄	易
401-24	孟子諺解	朝鮮版 (銅 活 字)	5	孟子諺解	附韓経
401-25	春秋胡氏伝	朝鮮版	10	春秋胡伝	春秋
401-26	春秋経伝集解	宋版 (淳 熙 3)	15	春秋経伝集解	春秋
401-27	論語	鎌倉写 (嘉 暦 2・3)	10	論語集解	四書
401-29	大広益会玉篇	元版 (至 正 26)	5	益会玉篇	小字
401-30	周易大旨 附：象原	明版 (嘉 靖 43)	4	易象大旨	易
401-32	〈増修互註〉礼部韻略	元版 (至 正 15)	5	礼部韻略増註	小韻
401-33	押韻釈疑	元版	5	押韻釈疑	小韻
401-34	古今韻会挙要	元版	20	古今韻会	小韻
401-35	六書正義	明版 (万 曆 33)	12	六書正義	小字
401-36	周易似言	明版	10	周易似言	易
401-37	尚書	古活字版	4	尚書伝	書
401-38	毛詩	版 (室 町 期)	12	毛詩	詩
401-40	五経傍訓	明版 (万 曆 23)	8	五経傍訓	経総
401-41	音註孟子	五山版	3	孟子註	四書
401-42	孟子	古活字版 (慶 長)	7	孟子註	四書
401-43	〈重刊許氏〉説文解字五音韻譜	明版 (嘉 靖)	6	覆刻宋板説文	小字
401-44	龍龕手鑑	古活字版	8	龍龕手鑑	小字
401-46	孝経抄	室町末写	1	孝経抄	国附経
401-47	經典題説	写 (伝 林 羅 山)	1	經典題説	国附経
401-49	三経附義	清版 (乾 隆 28)	4	三経附義	経総
401-50	易象正	明版	6	易象正	易
401-51	玩易微言摘抄	明版	6	玩易微言摘抄	易
401-52	〈御覧〉易经撰一	清版 (乾 隆 16)	10	易经撰一	易
401-53	周易弁	清版 (康 熙 18)	12	周易弁	易
401-54	四書備考	明版 (万 曆)	24	四書備考	四書
401-55	四書五経講宗	明版	2	四書五経講宗	経総
401-56	伏羲図賛	明版 (万 曆 37カ)	1	伏羲図賛	易
401-57	尚書埤伝	清版 (康 熙 12)	4	尚書埤伝	書
401-58	書伝	明版 (正 統 12, 監 本)	6	書経集伝	書
401-59	孝経大全	明版 (崇 禎 6)	4	孝経大全	孝
401-60	韻菴礼経蔵本	清版 (康 熙 15)	4	韻菴礼経蔵本	礼記
401-61	古今韻会挙要小補	明版 (万 曆)	20	韻会小補	小韻
401-62	四書経正録	明版 (崇 禎 4 序)	5	四書経正録	四書
401-63	韻補	明版	2	韻補	小韻
401-64	韻釈便覧	明版 (万 曆 18)	5	韻釈便覧	小韻
401-66	春秋実録	明版 (崇 禎 5 序)	6	春秋実録	春秋
401-67	春秋列国論	明版 (崇 禎 カ)	4	春秋列国論	春秋
401-68	説文解字韻譜	古活字版 (慶 長)	2	説文解字篆韻譜	小字
401-69	経言枝指	明版 (引 経 釈 2 冊) (漢 詁 纂 6 冊)	8	引経釈	四書
				漢詁纂	四書
401-70	古韻疏 一名：古唐韻略	清版	3	古唐韻疏	小韻
401-71	周易伝義	朝鮮版	12	周易伝義口訣	附韓経
401-72	魯論鈔 一名：論孟聴塵	写 (慶 長)	5	論語聴塵	国附経

来歴志 所載	収書年次	登録 番号	引継時 号数	旧函 号1	旧函 号2 (大正)	旧御物	家別	印譜 「紅葉山 文庫」	備 考
×	享保元以前（日・官）	6732	在10	甲414	な38	○	秘	①	
×	享保元以前（官）	6741	在10	甲414	な38	○	秘	①	
×	文政11（没）	6738	在10	甲414	な38	○	秘	①	
×	天保7～元治2（重＋元）	6740	在10	甲414	な38	○	秘	①	
×	文政11（佐）	6739	在10	甲414	な38	○	秘	①	
×	文政～元治？（元）	6733	在10	甲414	な38	○	秘	①	同装訂
×	文政～元治？（元）	6735	在10	甲414	な38	○	秘	①	
×	文政～元治？（元）	6734	在10	甲414	な38	○	秘	①	
×	享保16（日・右）	6730	在10	甲414	な38	○	秘	①・③	享保13献（実）
○	文政4（化）	6736	在10	甲414	な38	○	秘	①	移管時「満文輯韻」19冊
		6737	在10	甲414	な38			①	移管時「満文散語解」2冊
○	享和2（来）	6849	在17	甲421	な40	○	秘	①	足利学校本影写
○	寛政7（寛・来）	6750	在18	甲422	は5	○	秘	①	新井抱義献上
○	享和3（来）	6659	在1	甲401	貴	○	秘	①	金沢本
○	享保元以前（官）	6663	在1	甲401	貴	○	秘	①	金沢本 / 「論語正義」（重）
○	延宝8以前（人）	6672	在2下	甲403	か28	○	秘	①	
○	幕初（来・駿）	6742	在11	甲415	か29	○	秘	①	
○	享保・元文頃（昆）	6743	在12	甲416	か30	○	秘	①	
○	文政11（佐）	6679	在3	甲404	貴	○	秘	①・③	金沢本
×	幕初（駿・御）	6745	在14	甲418	さ36	○	秘	①・④	
○	幕初（駿・本）	6680	在4 上・下	甲405・ 406	貴	○	秘	①	金沢本
○	文政11（佐）	6744	在13	甲417	貴	○	秘	①	金沢本
○	元文5（始・日）	6681	在5	甲407 ～409	た33	○	秘	①	
×	享保16（日・右）	4591	—	甲137	た27	○	秘	×	M22目録にあり / 享保14献（実） 要検討

典拠略号

駿	駿府御文庫本たるによる	
慶	慶長御写本たるによる	
桜	桜田御文庫本たるによる	（『官』第6冊）
佐	佐伯毛利本たるによる	
前	前田綱紀献本	
新	新見正興献本	
近	近藤守重献本	
本	御本日記	
来	来歴志	
始	御文庫始末記	
日	御書物方日記（留牒含む）	
御	御文庫目録	
官	官庫書籍目録	（1～5）（＊：それと思しき書あり。確定に非ず。）
化	化政新収書目	
重	重訂御書籍目録	
元	元治増補御書籍目録	
実	徳川実紀	
寛	寛政重修諸家譜	
右	右文故事	
昆	昆陽漫録	
人	人見竹洞全集所収紅葉山文庫日録	
没	文政11幕府没収本（シーボルト事件）	

函架 番号	現行書名	刊 写	員数	〈元治増補〉(楓山文庫)御書籍目録	
				書 名	分類
401-73	論語抄	写 (慶 長 5)	5	論語抄	国附經
401-74	読書管見	清写	2	読書管見	書
401-75	〈増訂〉満文輯韻	写 (文 政 11)	11	増訂満文輯韻	国雑
401-76	論語	版 (文 化 10, 覆 正 平 版)	5	覆刻正平本論語	四書
401-77	論語	版 (天 文 2, 南 宗 寺 版)	2	東京魯論	四書
401-78	書詩礼曆考	写 (江 戸 末)	1	詩書礼曆考	国附經
401-79	春秋杜曆考	写 (江 戸 末)	2	春秋杜曆考	国附經
401-80	春秋述曆	写 (江 戸 末)	2	春秋長述曆	国附經
401-81	七經孟子考文	写 (享 保 11)	32	七經孟子考文	国附經
401-82	満文輯韻 附：散語解	写 (文 化 13)	21	満文輯韻	国雑
401-84	礼記正義	写 (宋紹熙刊本寛政6～8影写)	35	別本礼記正義	礼記
450-7	詩經図	写 (目録：新井君美自筆 狩 野 春 湖 画)	6	詩經図	国附經
506-1	尚書正義	宋版 (補 写, 金 沢 文 庫 印)	17	尚書正義	書
506-2	論語注疏	宋版 (補 写)	10	論語註疏	四書
506-32	四書白文	明写 (姜 立 綱 書)	8	四書白文	四書
506-33	〈纂図互註〉周礼	朝鮮版 (成 化 14)	7	纂図互註周礼	周礼
506-34	周易	古活字版 (慶 長 10, 伏 見 版)	3	周易註	易
510-2	集韻	宋版 (淳 熙)	9	集韻	小韻
511-40	〈新刊詳増補註東萊先生〉左氏博議	朝鮮版 (明 正 徳 6)	10	左伝東萊博義補註	春秋
550-1	〈杜氏〉春秋經伝集解	鎌倉写 (鎌 倉 中 期)	30	春秋經伝集解	春秋
550-3	春秋經伝集解 附：経伝識異	宋版 (嘉 定 9)	15	春秋經伝集解	春秋
554-23	唐開成石經	明版 (搦 本)	156	唐開成石經	経総
554-60	七經孟子考文補遺	写 (享 保 11)	32	七經孟子考文補遺	国附經

合 計 74部

786 点

分類略号

易	易類
書	書類
詩	詩類
周礼	礼類周礼之属
礼記	礼類礼記之属
雑礼	礼類雑礼之属
春秋	春秋類
孝	孝經類
経総	経総類
四書	四書類
小韻	小学類韻書之属
小字	小学類字書之属
国雑	国書部雑類
国附經	国書部附録経類
附韓經	附存部韓人著撰類経之属